

---

# ラストボーイ

ももか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラストボーイ

### 【Nコード】

N22228R

### 【作者名】

ももか

### 【あらすじ】

この世で生き延びるには  
騎士団に所属しなければならぬ。  
青年は父の敵を取るため、仲間を集めて  
悪神に挑むのだった。

## 第一話

「おまえの誕生日には帰ってくるからな。  
楽しみに待ってる・・・」

—————

青年は机の上の写真を手を取った。  
細かい彫り物がされている額縁に入っている写真には、  
四十歳前後の男が幼い頃の青年を抱き上げている。

「父さん・・・」

時は29xx年。

この時代は騎士団に入らなければ生きては行けない世の中であった。  
人間のある種が進化し、悪神となったこの世では  
騎士団の聖地である塔にいなければ  
やがて悪神に食われてしまうのだ。

そのため、悪神が生まれた時、  
塔にいなかった者達は次々と食われていった。

かつては四十あった騎士団の塔も  
今では世界で四つしかない。

北の塔、東の塔、南の塔、そして西の塔。

北、東、西の塔には三十人程の騎士が生きているが  
南の塔には四人しかいない。

写真を見ていたのは南の塔に所属している一人の青年であった。

青年の名前はアル口。

彼の父もまた、騎士団であった。

しかし、父も運悪く悪神に食われてしまった犠牲者の一人である。

「アル口。ご飯ができました。みんなも待ってます。」

「ああ．．．いま行く。」

青年は写真を机にしまい、部屋をあとにした。

## 第二話（上）

食堂にはすでに二人座っていた。

一人はやたらと目つきの悪い男。

煙草をくわえ、食堂の小さな椅子に堂々と座っている。

とても大柄で、アル口の三倍ほどはある。

もう一人は金髪でショートカットの女性。

こちらも大男に負けない程目つきが悪かった。

けれど女の方はスタイルは良く、一見モデルの様であった。

「待たせたな。リンダ。」

アル口は女性に向かって言った。

つまり、その女性の名前はリンダということになる。

ということとは・・・

「俺を忘れるな。」

「悪い。メリー。」

大男はどうやらメリーという名らしい・・・

「何回も呼んだのにきてくれないんですもん。」

「フィレッツエの声が小さかったんじゃないか？」

「す、そんなことはありません！」

そして、アル口を呼びにきた小柄な少女の名前は

リフレッシュメント

## 第二話（中）

アルロは空いている席に座った。

テーブルには豪華な料理が並べられている。

旬の野菜がふんだんに使われているスープ。

カリッと焼き上がっている鶏もも肉の照り焼き。

アサリと大葉の和風パスタ。皿の端にトマトが添えてある。

テーブルのど真ん中には大きなボウルに生野菜のサラダがおいである。

「では、いただきますしょう。」

フィレットツエが手を合わせると、

続いて全員も手を合わせた。

「父よ、あなたのいつくしみに感謝してこの食事をいただきます。

ここに用意されたものを祝福し、わたしたちの心と体を支える糧としてください。

いただきます。」

全員「いただきます」と言ってそれぞれフォークやスプーンを手に取った。

アルロはまず鶏肉を頬張った。

口にいった瞬間に溢れてくる肉汁。

皮はカリッとしていて肉は柔らかい。

照り焼きの味付けも抜群だ。

「フィレッツエ、おまえまた上達したか？」

「もちろんです。シエフは常に上達しなければなりません。料理長に教わっていた私を甘く見てもらっては困ります。」

フィレッツエの言う「料理長」という人物は

北の塔に所属している専属のシエフであり、かつてはその料理の腕前で数々の賞を総なめにしていた。

悪神があらわれてからは、北の塔で騎士達の食事を作っている。

「でもこの肉少し油っぽくない？」

肉を食べたリンダが言った。

「そうか？これくらいでないで体力はつかないぞ。」

メリーはさつきからみんなの倍程の早さで食べ物をたいらげていく。

食事が終わると、フィレッツエは食器を片付けたりテーブルを拭いたりしていた。

満腹になったメリーは先に部屋に戻って寝てしまった。そしてリンダとアル口は食堂でなにやら話をしていた。

「北の塔からの連絡によると悪神は私達のいる南の塔を襲撃するらしいわ。」

聖域であるから悪神は一步も踏み入れられないはずだったけれど．．



もうその聖域にも限界があるらしいの。  
なんたって騎士がすくないからね．．．  
それに、悪神の力が予想を遥かに超してしまつてね。  
塔にいるからといつても、安全は保証できないつて。

北の塔が一番安全だから、合流できればとりあえずは大丈夫だけど  
道のはりは遠いわ。その間に食われるとも限らない。」

真剣な顔でリンダはアルロに手帳に書いてあることを報告する。

「それじゃあ．．．戦うしかないつてことか？」

「ええ、そうなるでしょうね。」

アルロは冷静に見えたが、内心は複雑な想いでいつぱいだつた。  
戦いとなれば、強い者が生き残り、弱い者は食われていく。

この塔の指揮官であるアルロは強い。  
二つの銃を一度に使用できる戦法を身につけており、  
たとえ銃がなく、拳の戦いになつたとしても簡単には負けないであ  
るつう。

同じくリンダも強い。そのスタイルからは予想もつかない程の戦闘  
力で  
剣も使いこなす女剣士だ。その剣に勝るものはいないと言われてい  
る。

メリーも剣士である。しかし彼が武器とする剣は短剣だつた。  
そのため敵にかなり近づかないと攻撃ができない。  
けれど近づいたらこちらのものだ。メリーに倒せない者はない。

自分をいれたこの三人はよかつた。

アルロが一番心配だったのはフィレッツェだった。  
フィレッツェは料理を作る意外はなんの才能もない。  
サンドバッグを思い切り殴ったとしてもびくとも動かないだろう。  
剣を持たせたらその重さで持ち上げることできないだろうし、  
銃を持たせたら腰が抜けて撃つどころではない。

「心配なのはフィレッツェね。彼女、どうするつもり？  
一緒にこの塔を出ればすぐに食われる。  
かと言って、ここに残せば早かれ遅かれ食われるでしょうね。」

アルロの心を読み取ったかのようにリンダは聞いた。  
アルロはしばらく黙り込んでしまったが、  
ゆっくりと口を開くと

「フィレッツェも連れて行く。俺たちが守る。  
それにアイツは看護の知識が多少ある。俺たちが傷を負うことは避  
けることはできないだろう。」

「だからアイツには看護を中心に俺たちのバックアップをしてもらおう。」  
「そうね。それが一番賢い選択だわ。でもね、悪神は強い。  
自分の命を守るのに精一杯になるわ。そんな時にフィレッツェのこ  
とまで

頭が回るかどうか・・・」  
「分かってる。でもここでじっとしているよりはいいだろう。  
悪神の襲撃はいつになる。」

「五日後あたりだと言っていたわ。」

「それじゃあ四日目になったらこの塔は包囲されるだろうな。  
明後日．．．いや、あしたの午後には出発しよう。」

リンダは異論があった様だが、アルロの目を見て、  
黙ってうなずいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2228r/>

---

ラストボーイ

2011年10月7日23時14分発行